《公開講演会記録》

蔣介石外交の展開と日中戦争

―新著『蔣介石の外交戦略と日中戦争』を語る

敬愛大学教授　家近亮子

本日お話しさせていただく本書は、２０１２年10月に岩波書店から出版されましたが、じつは当初の計画より３年半遅れました。その最大の理由は、２００６年から蔣介石関連の史料がアメリカと台湾で相次いで公開されたことにあります。可能な限り新しく公開された史料を閲覧して執筆したいという思いが、早く出版しなくてはならないという気持ちに勝ったからです。

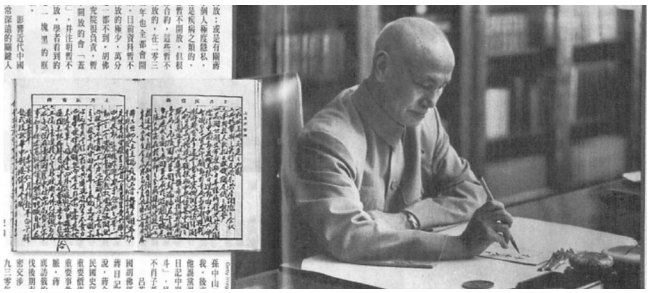
本日は、まず本書が主に使った史料、ついで本書執筆の目的、そして新しい視点と今後の課題という順序で話を進めていきたいと思います。

新公開の蔣介石関連の史料

1　「蔣介石日記」

「蔣介石日記」は、２００６年３月から２００９年７月にかけて、アメリカのスタンフォード大学フーヴァー研究所において段階的に公開されました。まず２００６年には１９１７年から36年の部分、２００７年には45年までの日中戦争の時期、そして２００８年には55年までが閲覧可能となりました。そして、最後の記述となった１９７２年７月21日分までが２００９年に開き、３年以上の歳月をかけた日記の公開が完了しました。

「蔣介石日記」の存在は、蔣介石の故郷の私塾の恩師であった毛思誠によって１９３６年に中国で出版された『民国十五年以前之蔣介石先生』によって一部の研究者には戦前から認識されていました。それが、一般に知られるようになったのは、１９７４年の「蔣介石秘録―日中関係八十年の証言―」という『サンケイ新聞』の２カ月半にわたる連載によるところが大きいと思います。

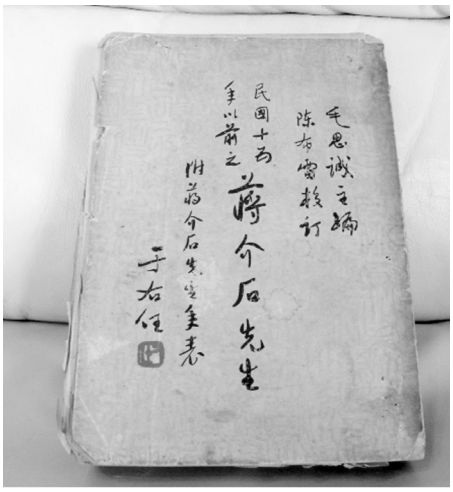


蔣介石と『蔣介石日記』

確かに、「蔣介石秘録」は多くの新事実を提供したため、台湾でも大きな話題となりました。「蔣介石秘録」は蔣介石自身が存命中に選抜し、提供した日記を基にして書かれたものでありました。

それでも、「日記」自体は『蔣介石秘録』出版後も保管場所すら明らかにされず、一般公開などはまったく望めない、まぼろしの史料のままでした。当然、公開が待たれていたわけですが、その実現にはそれから20年以上かかりました。

そのように公開に時間がかかったのは、親族や側近のプライバシーに触れる部分が多く、遺族である蔣家が難色を示したからです。しかし、夫人の宋美齢が２００３年10月に亡くなったことにより、翌年12月、蔣介石の孫の夫人である蔣方智怡氏(Elizabeth Chiang Fang Chih-yi)からフーヴァー研究所に預けられました。



毛思誠『民国十五年以前の蔣介石先生』

日記はなぜ台湾でなく、アメリカで公開されたのでしょうか。台湾では２０００年３月の総統選挙で民主進歩党の陳水扁が当選し、50年以上続いた中国国民党の一党支配体制が終わりました。その後、長く独裁的支配を続けていた蔣介石及び蔣一族に対する批判と攻撃が強くなったため、危険を感じた蔣家が日記をアメリカに移したのだといわれています。

フーヴァー研究所に委託（deposit）された（donate＝寄贈ではない）日記は、蔣介石が30歳であった１９１７年からのものです。それ以前の日記も存在はしていましたが、火事で消失したため、蔣自身の回憶の形で生い立ちからがまとめられています。

蔣介石は１８８７年10月31日に生まれ、１９７５年４月５日に亡くなりましたが、その大半の時期の日記を書き遺したことになります。蔣介石日記は、今も台湾で市販されている『国民日記』という日記帳に毛筆で綴られています。公開されているのは、そのオリジナルをデジタル化し、マイクロフィルムに収め、緑の紙にコピーしたものです。管理は大変厳しく、コピーや写真撮影、パソコンの持ち込みも禁止され、筆写のみが許可されています。したがって、すべての日記を写すには膨大な時間がかかります。

蔣介石は酒・煙草もたしなまず、極めて几帳面な性格で、日記を毎日欠かさずほぼ全スペースを埋めるように書いています。年代により多少の違いはありますが、「月日、曜日、気候（天気）、温度、年」を書き入れ、「提要」のスペースが２行分、本文が10行分あります（全部で３００字程度）。毎日の記述の他に、「上星期反省録」「本星期予定工作」「本月反省録」などのページが設定されています。

それではまず、「日記」の史料的価値と「日記」によって何が新たに明らかにされるのか、をまとめてみたいと思います。

公的面では、第１に近代史の極めて重要な時期、特に日中戦争時期の中国の政治、外交、軍事、財政の政策の多くが、蔣介石個人によって決断されていたことが分かるということです。

「日記」には重要な場面で「我決」「我主張」という文字が頻繁に出てきます。国家の行く末を左右する政策決定権を独占し、「越権指導」をしていたという点で、蔣はまぎれもなく「独裁者」であったと言えるでしょう。

第2に、蔣介石の対外的な「敵」は日本だけではなく、時には蔣自身がロシア帝国の性格を色濃く残していると見なしていたソ連も、また時には最大の帝国主義国・イギリスも敵であったということです。その意味で、蔣は強固な「反帝国主義」者であったといえるでしょう。蔣の反帝国主義は、イデオロギーではなく領土問題（清朝時期の版図の回復）と民族自決主義を基軸としている点で、孫文の反帝国主義論を継承しているともいえます。

そして、第3は対日観です。蔣介石は、留学経験で培った日本人及び日本社会に対する根本的な信頼から、戦争は日本政治の一時的な歪みであり、「軍閥」（日本の軍部）が駆逐されれば、友好関係を再構築できると確信していました。特に、太平洋戦争の勃発後は、早期の日本の敗北を確信し（1年後には決着がつくことを望んでいたようです）、戦後構想を練るようになりますが、その中での日本は民主化した同盟国でした。そのために蔣はさまざまな工作を考えていきます。

私的側面では、第1に蔣介石がこれまで伝えられてきた以上に敬虔なクリスチャン（メソジスト・敬虔主義）であったことがわかります。蔣は1927年に結婚した4人目の妻・宋美齢の影響で1930年に洗礼を受けますが、日を追うごとに熱心な信者になっていったことが日記からは読み取れます。朝の礼拝（蔣は「日課」と書いています）は欠かさずおこない、逡巡する場面では「上帝」の判断を仰ぎ、行動後は、それは「上帝」の意志であったとして自分を納得させる。このような思考の繰り返しを随所に見ることができます。

第2に精神的な不安定さです。蔣介石は時に躁鬱症状を見せます。鬱になったのは、日記から判断すると、1923年の訪ソの時期であったようです。「曇りの日は気が滅入る」という記述がこの時から始まります。このフレーズはその後も何度も出てきて、孤独な権力者の苦悩が伝わってきます。また、時には躁状態にもなります。上海事変時の積極的な軍事行動などはその典型的な表れと見ることができます。

そして、第3は他人または外国からの自分及び国民党、国民政府に対する評価に非常に敏感であったことです。自分がどのように評価されているかに異常なほどの神経を使い、情報を収集していました。特に太平洋戦争勃発以後は、アメリカやイギリスなど連合国における自分に対する記事を収集し、それをスクラップし、日記に挟み込んでいるのです。その記事の内容から、蔣が何に関心を持っていたかが分かります。

一方、「蔣介石日記」の史料としての限界は、以下の点に求められます。

第1に、どこまで正確に内容を読み取ることができるかです。「日記」は毛筆をマイクロ化し、さらにコピーしてあるため、黒く潰れて読み取れない文字が少なからずあります。また、蔣介石自身のくせ字、崩し字も多いため、完全に、かつ正確に書き写すことは極めて困難な作業です。オリジナルを参照できないため、判読不明な文字は推測の域を出ないままとならざるを得ません。

第2は、1917年以前の蔣介石の履歴の再現問題です。1917年以前の「日記」は蔣の回憶の形式で書かれているため、日付等に曖昧な点が多いのです。特にこの時期、蔣は「余が～歳の時」という書き方をしているのですが、旧暦、数え年のため、年月日に混乱を来すことがあります。例えば、蔣の誕生日は新暦では10月31日ですが、蔣自身は10月10日と認識していました。この旧暦、新暦問題のため、これまでに出版された蔣介石関連の資料および研究書は、初期の履歴に関しての記述に不統一が見られます。

第3は、1924年分の「日記」が完全に欠落している問題です。この問題に関しては、これまでさまざまな説が伝えられてきました。中国社会科学院近代史研究所の楊天石氏によると、この年の「日記」は中国共産党が「盗みだし」、その後、廃棄もしくは紛失されたため現存しないということです。1924年は中国近代史においては第一次国共合作成立の年であり、また蔣介石自身も黄埔軍官学校の校長に就任した重要な年です。共産党はなぜ1924年の「日記」を持ち出したのか、そこに何が書かれていたのか。このことは、蔣介石関連で未だに発見されていない重要な一資料と関連があると思われます。

それは、1923年8月、蔣が孫文の命により「孫逸仙博士代表団」の団長としてソ連を視察したときの報告書（「游俄報告書」）です。

蔣のソ連滞在は3カ月に及びましたが、その間、スターリンはじめソ連共産党およびコミンテルンの要人たちと会見し、またソ連共産党大会にも参加しています。その結果、蔣介石は、孫文および三民主義をソ連は軽んじているから、国共合作をおこなえば、最終的には中国共産党を傀儡としてソ連が国家的侵略をおこなう危険性があるとして、これに強く反対しました。そのことは、蔣の3番目の妻であった陳潔如の「回憶録」に収録されている蔣介石からの手紙で確認することができます。しかし、その孫文への進言はついに日の目を見ることはありませんでした。その報告書は、孫文自身が握り潰した可能性が最も高いと思います。蔣経国は「この資料だけはどうしても発見できない」と語っています。

ですから現在、蔣介石の第一次国共合作に関する考えや、それをめぐる孫文との対立の構造は史料的裏付けをとることが困難な状況にあります。したがって、断片的であれその時の状況を書き残している陳潔如の「回憶録」は重要な資料であるといえます。

最後の問題点は、陳潔如関連の記述が削除されていることです。公開された「蔣介石日記」には明らかに後から黒く塗りつぶされた箇所が多く見られます。そのほとんどは陳潔如に関する記述で、蔣介石自身が朱を入れて塗りつぶした箇所と公開にあたって遺族が削除した部分があります。削除部分がかなりの範囲に及ぶ年もあります。その意味で、公開されている「日記」は完全なものではありません。なぜ、陳潔如に関する記述が削除されなくてはならないのか？　そこには、蔣と宋美齢との再婚にまつわるエピソードがありました。

陳潔如の生い立ちには、不明な点が多いのです。潔如にかんする史料は、潔如が蔣介石のすすめで書いた「日記」をもとにしたJennie Che-Ju Chen（陳潔如のアメリカ名）の“MY MEMOIRS”が残されているのみです。これは、スタンフォード大学のフーヴァー研究所に“CHEN, CHE-JU MEMOIR OF LIFE WITH CHIANG KAI SHEK”〔HOOVER INSTITUTION ARCHIVES, CHANG HSIH HAI（張歆―筆者注）BOX NO. 16〕として所蔵されています。

この回憶録は英文で書かれており、年月日が曖昧な点が多く、生年月日や蔣介石との出会いの日付等は確定できませんが、潔如に関する唯一の史料であり、蔣介石からの手紙が多数収録されているため、資料的価値は高いといえます。

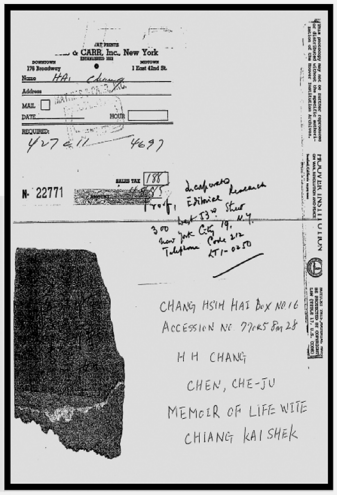
それによると、陳潔如は、1919年に上海で蔡元培が創立した「愛国女学校」に入学した時が13歳とあります。ですから生年は1906年ということになります。彼女の父親は上海で紙の工芸品などを扱う商店を営んでおり、孫文とは親交がありました。蔣介石との出会いは、1

919年で孫文の紹介によるものでした。潔如は非常に背が高かったため、その時18歳くらいに見えたといわれています。蔣と潔如が同居をし、結婚するのは、その2年後の1921年です。この時、彼らは結婚式を挙げ、その招待状の写真が残されています。

さて、1927年8月19日、宋美齢との再婚を決めた蔣介石の指示でアメリカに渡った潔如は、コロンビア大学で政治学と行政学を学び、1933年自らの意志で上海に戻ります。この時は、「陳璐」という名を名乗り、蔣介石の用意した家に住み、仕送りを受けていました。

1949年12月には台湾に渡ろうとしますが、宋家の圧力で果せず、上海に残りました。中華人民共和国では上海市滬湾区政協委員などに選ばれますが、反右派闘争が始まると、1961年12月、周恩来の勧めで香港に移り住みます。香港では、蔣経国名義で送られてきた資金で九龍に家を購入して住んでいました。経国は幼い頃、潔如を「上海のママ」と呼んでいたのです。潔如は1971年2月21日、65歳の生涯を閉じますが、二人の間には、娘・蔣瑤光がいました。

陳潔如の回憶によると、蔣介石と宋美齢が初めて出会ったのは、宋家の長女・靄齢が蔣と潔如夫妻を自宅に招待した1926年の5月でした。宋靄齢と美齢は潔如を「蔣夫人」としてもてなしたのですが、その時、彼女たちは潔如について、中国の指導者になる男の妻としてはふさわしくないことを暗に指摘したりしました。また、蔣の正妻である毛福梅、2番目の妻である姚怡誠の様子とその関係について盛んに質問していることから、この時点で蔣介石との再婚を宋家は計画していたと思われます。7月27日、蔣は北伐に出発しますが、戦地には美齢からの電報や手紙が届くようになります。



蔣介石と陳潔如の結婚式の招待状（下）とフーヴァー研究所の陳潔如回憶録（右）

1927年には、蔣介石は武漢政府のなかで自分が孤立し、周りは敵ばかりであることを嘆くようになります。当時、漢口（武漢の一部）の街中には「革命を成功させるためには、まず蔣介石を打倒せよ！」という内容のビラが至る所に貼られ、『漢口民国日報』紙上では蔣介石の「独裁」を批判する記事が連日のように掲載されました。

そんな中、宋靄齢が九江を訪れ、船上で蔣介石に美齢との再婚話を持ちかけます。その日付は、「蔣介石日記」の3月18日に「先日、宋太夫人（宋三姉妹の母親―倪桂珍）と孔宋夫人（靄齢）が九江に来た」とあるので、15日前後と推測できます。この時、靄齢は蔣に対して、「もし、中国の解放と中華の再建、そして憲法制定の大業を完成しようと望むのなら、巨大な力と金銭、気迫と特権が必要となる」のだから、蔣が現在の周囲の人間関係を清算し、美齢と再婚して宋家と手を結べば、上海の大銀行が後ろ盾になって北伐を完成できること、そして、南京政府が成立した際には、靄齢の夫で

ある孔祥熙を行政院長に、弟の宋子文を財政部長にすることを申し入れたのです。

この会見の様子を蔣介石は帰宅すると直ぐ潔如につぶさに伝えました。その意味では、蔣は潔如を心から信頼していたと言えます。この時、蔣は「私の状況は、絶望的である。彼女（靄齡）の言うことは本当だ。私はもはや武漢政府から資金も武器も糧食などの軍需品の支給も期待できない。今や彼女の申し入れだけが救いである」と説明したのです。そして、次のように一気に話しました。

“I now ask you to help me. I beg you not to say no. To step aside for five years to

allow me marry Mayling Soong and get the necessary help to carry on the expedition,

independent of Hankow ! It's only a political marriage !”

（今、私には君の協力が必要だ。決して嫌とは言わないでくれ。私が美齡と結婚し、北伐を続行するために必要な援助を得ることができるよう、そして武漢に頼らずに独り立ちが出来るようになるために、どうか5年の間、妻の座を去ることを承諾してくれないだろうか。これは、単に政略結婚に過ぎないのだ！）

同時に宋家の条件が潔如と別れることであることも伝えました。潔如は突然のことで非常に驚きましたが、とっさにこれは拒否できないことも悟ったのです。このような蔣と潔如の別れ、美齡との再婚、潔如のアメリカ留学計画は当然ながら、潔如の母親の知るところとなります。回憶録によると、蔣は一人で護衛を伴わず、私服で上海の母親の家に身を寄せていた潔如を訪ね、アメリカ行きの船‘President Jackson’号のチケットを渡します。それは、8月19日のものでした。蔣は義母に対して、南京国民政府は専門知識をもった若い人材を必要としているので、政府の要職に就くため、潔如はアメリカに5年間だけ留学に行くという説明をおこないます。この時、母は厳しくそれが嘘でないことを仏陀の前で誓うように迫ります。これに対して、蔣は“Should I break my promise and fail to take her back, may the Great Buddha smite me and my Nanking Government.”（もし、私が約束を破り、彼女を連れ戻すことができなかったなら、偉大なる仏陀が私と南京政府を罰するであろう）と述べ、必ず5年で帰国させると誓い、テーブルの上にチケットを置いて家を去ったのです。この時点では蔣はまだ潔如母子と同様、敬虔な仏教徒でありました。

このようにして、潔如を犠牲にした美齡との結婚は、その後も蔣に未練と後悔を残すことになりました。蔣自身が潔如に対する思いを綴った「日記」の箇所を削除し、遺族が潔如関連の記述を残したくないという思いは、十分に理解することができるものです。

2　台湾国史館の檔案史料

中国は明・清時代から政府の公文書を永久保存するための管理を厳重におこなってきました。それらは中国においては「檔案」と呼ばれています。国民政府は台湾移転の際に膨大な数の檔案史料を大陸から持ち出しました。ここには蔣介石が国民政府および国民党員、軍関係の要人、市レベルに至る地方の指導者および役人、各国に派遣した外交官に宛てた電文、それに対する返電（来電）、また、蔣介石と各国駐華大使との会談の記録、各国元首との往来書簡、蔣介石と側近との電話の記録などのメモ書きにいたるまでのすべての史料が収録されています。

台湾における１９４９年以前の檔案史料は、主に国史館、中央研究院近代史研究所に非公開で保管されてきましたが、

１９７５年の蔣介石の死以降の中華民国の「民主化」と「台湾化」という政治状況の変化によって、デジタル化されて一般公開されるようになりました。

台湾の国史館に保管されている檔案は、「総統副総統文物」と「一般史料檔案」に二分されています。本書執筆にあたっては、「蔣中正総統文物」を中心にして、「国民政府檔案」「外交部檔案」「汪兆銘史料」などを補完的に使用しました。国史館史料の閲覧は、現時点（２０１３年１月）では、手書きとパソコンによる書き取りは許されていますが、コピーはとることができません。

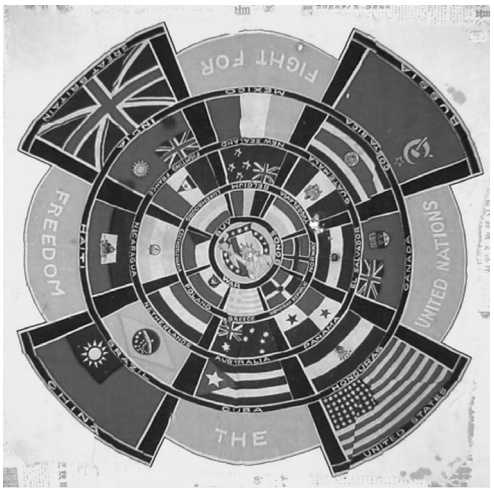
では、「蔣介石日記」とこれらの檔案史料はどのような関係にあるのでしょうか。一般的に「日記」の史料的価値に関してはこれまで多くの論争がありましたが、「蔣介石日記」に限って言うと、それは、一日分の仕事の抜粋を書き記した備忘録の性質が強いということができます。蔣は主にそれを「預定」「反省」などの項目にしてまとめて箇条書きにして書き記しています。

しかし、その背後には膨大な量の作業工程が隠れています。その全貌を明らかにするのが檔案史料です。しかし、「日記」ならではの記述もあることも確かです。それは、蔣介石の感情の起伏、政策決定に至る考えとそれに対する焦りやプライド、反省や後悔、政策決定には至らなかったが、その時々で重要と思ったこと、実現したかった政策、実現できずに吐露した忸怩たる思いなどを知ることにつながります。いわば、現在のブログやツイッターの役割を果たしていたともいえる「日記」は、個人史研究には欠かせない史料となるのではないでしょうか。

本書執筆の目的と新視点

本書執筆の動機は、中国が近代において国際的に「次植民地」（孫文の言葉、植民地以下の意味）、「半植民地」（毛沢東の言葉）の地位にありながら、第２次大戦後、国際連合の安全保障理事会の常任理事国になり、５大国の１つになった要因を分析することにあります。「なぜ、中国は抗日戦争を戦う過程で国際的地位を飛躍的に上げることができたのか？」という疑問への答えを出すことです。

ここで１枚の写真をご紹介します。日米開戦すなわち、太平洋戦争が起きたあと、１９４２年からアメリカが戦時国債を売り出し、国民から戦費を集めるために売り出した記念のスカーフです。このスカーフの「連合国26カ国旗」デザインを見ると、中国はすでに４大国の１つになっています。つまり、中国は１９４２年の時点で４大国の１つに仲間入りし、国際的地位を押し上げていたと言えます。これを可能にしたのは、中華民国国民政府であり、中国国民党であり、その指導者であった蔣介石の外交戦略でありました。これは私の長年の主張です。



連合国26カ国旗

蔣介石は、「日記」（１９４１年12月９日「上星期反省録」）の中で１９４１年12月８日の太平洋戦争の勃発は、「抗戦四年半以来の最大の効果であり、また唯一の目的であった」と綴っています。日本による真珠湾攻撃の翌９日午後５時、

蔣介石は自ら国防最高会議常務会議を招集し、「英米諸友邦」と共に「対日独伊宣戦」をおこなうことを即座に決定しました。蔣介石はその後、中国は連合国側の一員であり、日中戦争は第２次世界大戦の一部であることを各所で強調します。

このような蔣介石に対して、12月31日にはルーズヴェルト大統領が蔣介石に南太平洋戦区に中国戦区最高統帥部の設定を提議します。そして、42年１月５日、蔣介石はタイ、ベトナムなどを含む連合軍中国戦区最高司令官に就任します。連合軍より中国戦区に与えられた任務は、英米軍の後方支援、特に空軍への基地（重慶・成都等）の提供、およびビルマ作戦でした。

１９４２年元旦の「書告海内外軍民僑胞（「国内外の軍民及び華僑同胞に告げる書」）で蔣介石は、中国がワシントンで26カ国と結んだ「反侵略共同宣言（連合国共同宣言）」において中心的役割を果たしたことを評価され、英米ソとともに「世界四強之一」になったことに言及しています。１月３日の「日記」には「我が国が共同宣言を締結した時に、ルーズヴェルト大統領が特別に子文（宋子文―美齢の弟）に中国が四強の一つになったことを歓迎すると表明した」とあります。

これが、戦後に中国が５大国の１つとして、国連安全保障理事会の常任理事国となることができた第一歩であったことは明らかです。

しかし、このことは中国共産党が長年語ってきた抗日戦争の歴史からは完全に抜け落ちていました。なぜなら、抗日戦争は中国共産党と毛沢東が一貫して指導したものであり、国民政府および蔣介石の役割はまったく評価されなかったばかりでなく、戦わずに日本に妥協した「人民の公敵」とされてきたからです。

２００５年９月６日、「中国人民抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利60周年記念大会」に出席した胡錦濤国家主席は、共産党の首脳としては初めて、国民党の抗日戦争における役割に一定の評価を与える演説をおこないました。日本のメディアはこれを「画期的なこと」として評価しましたが、それはあくまでも「中国共産党が指導する抗日民族統一戦線の旗印の下」での「中国国民党の軍隊」に対する評価に限定されていました。ここでは、孫文に対しては高い評価が与えられましたが、日中戦争の中国軍の最高司令官であった蔣介石に関しては言及すらありませんでした。中国共産党の歴史認識によれば、抗日戦争はあくまでも日本の侵略に対する中国人民の抵抗を主体とする人民戦争であり、そのため、２国間戦争の枠組みでの分析がなされてきたのです。

本書執筆の最大の目的は、共産党の中国近現代史観に対して、グローバルな視野を提起し、中華民国国民政府およびそれを独裁的に指導していた蔣介石の外交戦略を再構築し、正当に評価することにあります。しかし、私は中国共産党と毛沢東の役割を否定するのでも、過小評価するわけでもありません。抗日戦争は、光のあて方を変えると、異なった様相を呈する多面体のプリズムのようなものであると考えています。毛沢東の戦略と戦術が極めて有効に働いた時期と場所があったことは、認めざるを得ないと思います。

中国の風刺漫画
『人民公敵蔣介石』

次に本書が日中戦争研究に提起した新しい視点についてお話しします。新視点は以下にまとめることができます。

① 蔣介石にとって、抗日戦争は民国元年に構想した中国外交の大きな枠組みの一つにすぎず、その意味で通過点であったといえます。蔣は、抗日戦争を中国の国際的地位向上のためのステップにしようとしました。すなわち、中国が近代から抱えていた西洋列強との不平等な条約を改正して、真に平等な国際的地位を獲得することは、英米と「反ファシズム」戦争のための同盟を組むことで達成されたのです。同時に蔣はソ連やイギリスとの領土問題を解決しようとしましたが、これは成功したとは言えません。１９４１年12月に太平洋戦争が勃発すると、日本に対する勝利を確信した蔣は外モンゴル、新疆問題をソ連と、香港、チベット問題をイギリスと解決しようとします。そのため、１９４３年頃からは、ソ連、イギリスと対立するようになります。そのことが、後の国共内戦に至って国民党に不利に作用したといえます。これに対して、毛沢東率いる共産党は結党以来、日本のみを主要敵とし、その他の矛盾を「副次的矛盾」としたことで、ソ連の援助とイギリスの中立を勝ちとったのです。

② 日中戦争は１９３７年７月７日に始まりましたが、蔣介石の持論ではその前に日ソ開戦および第２次世界大戦が勃発し、日本はそれに専念するため、中国本土への軍事侵攻はないはずでした。そのため、「持久戦論」を展開したのです。

蔣は１９３４年12月に雑誌『外交評論』に「敵乎？友乎？一中日関係の検討」という論文を徐道鄰の名義で発表します。

ここで蔣は、日本は結局は敵にならないし、日中は敵対してはいけないという見解を示したのです。この論文は日本でも話題になり『中央公論』などの多くの雑誌がその翻訳を掲載しました。

翌１９３５年は日中間に「親善ブーム」が起き、貿易や留学などの人的交流が盛んになりました。しかし、その陰で蔣介石は四川省を根拠地とする奥地建設を開始し、イタリアから魚雷快艇を多数購入して揚子江に配備し、来るべき日本軍の進攻を防ぐ準備をおこないました。蔣自身が「日記」の中で述懐しているように、もし、奥地の根拠地がなかったら、中国は海上を日本軍に封鎖されたため、持久戦を戦うことはできなかったといえます。「一面交渉、一面抵抗」「不戦不和」という分かりにくい戦略に日本はその後翻弄され、次第に泥沼の日中戦争へとのめり込んでしまうのです。

③ これまで、あまり注目されなかった１９３８年５月20日の中国空軍機２機による日本への初めての熊本・宮崎「空襲」（中国では「人道飛行」と呼びました）がもつ戦略的意義を分析しました。蔣介石は、この飛行を一つの経験値として英米に対して中国に空軍基地を置くことの地政学的な利便性を強調し、対日参戦を促します。その意味で、この「人道飛行」は歴史的な意義が大きいのです。

④ 最後に、蔣介石による対米、特にルーズヴェルト密着外交の実態を明らかにしたことです。これは、国史館の檔案史料が公開されたことで可能となりました。ルーズヴェルト大統領の母方のデラノ家はアヘン戦争以来、中国貿易で財を成し

「敵乎？友乎？」の雑誌

ました。そのため、ルーズヴェルトは歴代の大統領の中で最も中国に精通し、人脈も多く、中国に同情的な「親華派」の大統領であったといわれています。大統領は、1939年11月4日に顔恵慶と会見しましたが、この時「私の母方の祖父は中国で会社を経営していた。我が家は中国に三代の友誼がある。中国の災難は常に私が心を痛めていることである」と語っています。

蔣の連絡役となったのが主に駐米大（公）使であった顧恵慶、王正廷、胡適（1939年9月～）と40年6月から駐米全権代表となった宋子文らです。太平洋戦争勃発まで胡適と宋子文は交替でほぼ毎日のようにルーズヴェルトを訪ね、蔣の意向を伝え、大統領からの返事を受け取り、蔣に送っていました。蔣は、ルーズヴェルトの置かれた政治的立場（大統領選挙）を熟知し、アメリカの「法律（主に中立法）の範囲内」で可能となるあらゆる政策の実行を模索し、提案し、要請したのです。

これに対して、ルーズヴェルトは常に中国に深い同情の気持ちを伝えました。蔣の望みは、対日制裁と中国への援助が十分に行われ、アメリカが対日参戦に踏み切ることでした。その意味で、日米開戦は蔣介石にとって「本日、抗日戦争の政略の成就が頂点に達した」（「蔣介石日記」1941年12月8日）のであり、「抗戦四年半以来の最大の成果であり、また唯一の目的であった」（「先週の反省録」1941年12月9日）のでした。

1938年5月20日の中国空軍機による「空襲」を伝える号外と中国の新聞記事

今後の課題

本書に続いて、できるだけ早い時期に1942年から1949年までの時期の蔣介石の外交戦略をテーマに内容的には続編となる本を執筆したいと思っています。本書の「終章」で大まかなあらすじは示してあります。蔣は、日米開戦後は持久戦論ではなく、できるだけ早期に日中戦争を終わらせたいと考えていました。蔣の予測では戦争は1年で終わるはずでした。それは、長引けば中国の国土の多くが戦場となり、中国が荒廃し、共産勢力がさらに伸張し、戦後国民党が政権を掌握するのが困難になると考えていたからです。しかし、蔣の思惑ははずれ、前述したようにイギリス、ソ連と領土問題で対立を深め、共産党の勢力は予想以上に拡大し、連合国の戦闘機が中国国内の日本軍の基地を爆撃するようになり、汪精衛らの親日政権が成立するにいたります。

そのような中で蔣介石は戦後構想を練りますが、その中での日本は主要敵の地位にはなく、アメリカの同盟国となり、豊かな民主主義の国家として再生すべき存在でした。そのため、蔣は戦後すぐにいわゆる「以徳報怨」の演説をおこない、中国人民に「報復してはならない」と訴え、日本軍民の帰還に対して支援をしていきます。続編では、日本が「敵」から真の「友」として認識される過程を描いていきたいと思います。

（1月25日・公開フォーラム）

講師略歴（いえちか　りょうこ）
1992年　慶應義塾大学大学院博士課程修了・博士（法学）
現在　敬愛大学国際学部教授
著書　『日中関係の基礎構造』ほか